

# 農業

## 一つの産業として戦略必要 費用対効果考え予算使って

選択のとき 09総選挙

### 私の見方

坂上 隆さん(41)



農業生産法人「さかうえ」社長。青汁用のケール、焼酎用のサツマイモなど食品加工会社などとの契約栽培にも力を入れる。現在、農水省の飼料生産に関する会議の委員を務める。志布志市在住。

農業は転換期を迎えている。昔は家族経営という考え方が当たり前だったが、社会情勢の変化とともに考え方も変わってきた。今では農業法人が増え、企業として成り立って

いる。農業も一つの産業としてどう伸ばすか戦略をもちて政策を立てる時期だと感じる。農家や経営者も努力が必要だ。「鹿児島は消費地から遠

いからのハンディがある」とよく聞かすが、強みもたくさんある。早く春が来て暖かい。輸作が可能だから1年で色々な作物を回せる。畜産も強い。そういった環境の中で、うちの

会社は飼料作物を作り、畜産農家への販売を始めた。

単価の安い家畜のエサなんて作る農家はいなかった。たれもビジネスになるとは思わない。それをやった。何をどういう組み合わせで作り、事業展開するか分析する中でその発想が生まれた。その結果、今までできなかったと思っていただけが可能となり、新しいビジネスが生まれた。

収入面でも変化は出ている。農業は収入が安いから若者の雇用はつながらないと言われているが、公務員より高い給料を出す農業法人が全国にはある。若い人が入ればさらに利益率も上がる。そうした会社はどんどん増えていくはずだ。「農業は安い」とい

う概念は徐々に薄くなっていく。農業が産業として発展するには、こうした動きを伸ばす政策が必要になる。

だが、すべての農家が経営戦略を持ち、市場原理の中で発展するわけではなく、保護しなければならない部分も多い。兼業農家もあれば、お年寄りや細々とやっている所もある。景観や環境面から守ら

なければならぬ場合もある。国はそこを見極め、費用対効果考えた予算の使い方をすべきだ。

産業として発展させるために必要な部分とそうでない部分とを分け、多様性のある政策を考えてほしい。

(このシリーズは矢野慶一、安斎耕一、倉藤徹、森本浩一が担当しました)